

横浜合唱協会 第65回定期演奏会



2015年8月9日(日)
横浜みなとみらいホール 大ホール
主催：横浜合唱協会

横浜合唱協会 第65回定期演奏会

バッハとメンデルスゾーン

～ドイツ交流演奏会に向けて～

F.メンデルスゾーン (1809～1847)

"Lass, o Herr, mich Hilfe finden" Op.96-1

おお主よ、私を助けてください

"Herr, nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren" Op.69-1

主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせてくださいます

Magnificat "Mein Herz erhebet Gott" Op.69-3

マニフィカト「わたしの心は神をあがめ」

J.S.バッハ (1685～1750)

Kantate "Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit" BWV106

カンタータ第106番「神の時こそ、最良の時」

—— 休 憩 ——

F.メンデルスゾーン (1809～1847)

"Die Deutsche Liturgie" MWV B57

ドイツ典礼

J.S.バッハ (1685～1750)

"Singet dem Herrn ein neues Lied" BWV225

主に向かって新しい歌をうたえ

"Messe in A-dur" BWV234

ミサ曲 イ長調

指 揮：八尋 和美／山神 健志

ソ プ ラ ノ：星川 美保子

ア ル ト：小川 明子

テ ノ ー ル：鏡 貴之

バ ス：成瀬 当正

管 弦 楽：東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

合 唱：横浜合唱協会

ごあいさつ

本日は横浜合唱協会第65回定期演奏会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

今回は、本年9月に予定しているドイツ演奏旅行と現地合唱団との交流演奏会で演奏する、J.S.バッハのミサ、モテットとF.メンデルスゾーンのモテット他を演奏致します。当団にとりドイツ演奏旅行は今回で4回目になりますが、現地合唱団との交流演奏会は初めての経験で、このチャンスを生かして今後の歌唱の向上に向けて多くを学んで帰りたいと思います。

さて、この度大変残念ですが、42年間にわたり私たちをご指導いただいた八尋和美先生が本日の演奏会を最後に常任指揮者を退任されることになりました。横浜合唱協会が今日あるのは、ひとえに八尋先生のご尽力のおかげです。本日は団員一同、先生への感謝の気持ちを込めて歌います。

今後は本日のもう一人の指揮者の山神健志先生にご指導をお願いすることになりました。今後とも引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。

2015年8月9日

横浜合唱協会 代表 堂崎 浩

プロフィール

八尋 和美（やひろ かずみ／指揮）

東京芸術大学声楽科卒業。声楽を矢田部勁吉、指揮法を渡辺暁雄の諸氏に師事。芸大卒業と同時に東京混声合唱団の創立に参加。以来、東京混声合唱団のコンサートマスターとして、同団のトレーニング、編曲、指揮者として活躍。1973年、東京混声合唱団指揮者に就任。同団との全国的な演奏活動の他、アマチュア合唱団の指導、合唱指導者の育成にも優れた手腕を発揮している。1982年、文化庁芸術家在外研修員として旧東ドイツを中心に研鑽を積む。1997年、東京混声合唱団正指揮者に就任。現在、くらしき作陽大学客員教授。横浜合唱協会は1973年より指導。

山神 健志（やまがみ たけし／指揮）

1973年生まれ。自由学園最高学部卒業、東京芸術大学卒業後イタリアに留学。帰国後、合唱指揮者として活動を開始。現在は、児童合唱から大規模な混声合唱まで多くの合唱団の常任指揮者を務めるほか、各地で市民参加による公募合唱団を指導。最近では2011年ベートーヴェン『第九』（指揮：ヤクブ・フルシャ）、ドヴォルザーク『スターバト・マーテル』（指揮：広上淳一）、2013年ヴェルディ『レクイエム』（指揮：三ツ橋敬子）、2014年ブラームス『ドイツ・レクイエム』（指揮：広上淳一）等の合唱指揮を担当。その的確な指導は共演した内外の指揮者や合唱団から信頼を得ている。

また、オーケストラと歌う素晴らしさを子どもから大人まで広く体験してもらおうと精力的に活動し、これまでにジョン・ラッター『子どもたちのミサ』（オーケストラ版日本初演）、上田真樹「あらしのよるに」（オーケストラ版委嘱初演）をはじめ、多くのコンサートを企画、指揮している。オーケストラ指揮の分野でも特に宗教音楽での評価が高く、今後の活躍が期待されている指揮者である。今回初めて横浜合唱協会を指揮する。

星川 美保子（ほしかわ みほこ／ソプラノ）

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院オペラ科修了。2003年よりドイツ・ライプチヒに留学。Christina Wartenberg氏に師事。留学後の2005年3月に行われた二期会公演『魔笛』パミーナ役への抜擢で一躍脚光を浴び、続く10月の二期会研修所創立50周年記念公演／鈴木雅明指揮『ジュリアス・シーザー』で演じたクレオパトラ役では、確かな歌唱技術と卓越した表現力、艶やかな舞台容姿で聴衆を魅了し、絶賛を博した。さらに2008年には日生劇場『魔笛』（上岡敏之指揮・読売日本交響楽団）パミーナでも優れた演唱で高い評価を得た。コンサートに於いては、透明度の高い声質を生かし、殊に宗教曲を得意としており、バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」、「口短調ミサ曲」、モーツァルト「モテット」、「レクイエム」などのソリストを務める。また飯守泰次郎、下野竜也指揮によるベートーヴェン「エグモント」でも好評を博している。2007年NHKFM「名曲リサイタル」に出演。芸大在学中、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブに所属し、小林道夫氏のもとで研鑽を積み、バッハのカンタータのソロ及び合唱を数多く演奏している。

プロフィール

小川明子（おがわ あきこ／アルト）

東京芸術大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所第10期修了。高橋啓三、渡邊高之助、戸田敏子、毛利準、アデーレ・ハースの各氏に師事。1992年第61回日本音楽コンクール声楽（歌曲）部門第2位。第4回日本声楽コンクール第3位。1993年第4回日本歌曲コンクール第1位ならびに山田耕筰賞受賞。1997年文化庁芸術家在外派遣研修員としてウイーンに留学。

バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ハイドン、シューベルト、ブルックナー等の宗教曲、コンサートではベートーヴェン「第九」、マーラー「嘆きの歌」「復活」「大地の歌」、メンデルスゾーン「ワルプルギスの第一夜」、ベルリオーズ「ロミオとジュリエット」等に、またモーツァルト『魔笛』、フンパーディンク『ヘンゼルとグレーテル』、原嘉壽子『祝い歌が流れる夜に』、水野修孝『天守物語』、ラヴェル『子供と魔法』、ワーグナー『さまよえるオランダ人』等のオペラに出演。CD「日本歌曲選」、「啄木とみすゞを歌う」、「からたちの花 山田耕筰歌曲集」「荒城の月 国歌を離陸させた偉人たち」「早春賦 日本歌曲選2」をリリース。二期会会員。

鏡 貴之（かがみ たかゆき／テノール）

岩手県盛岡市出身。岩手大学教育学部卒業。東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S.バッハの作品では多数の声楽作品のソロを務め、活動の中心になっている。これまでにヘルムート・ヴィンシャーマン、ハンス・マルティン・シュナイト、鈴木雅明、ヴォルフ・ディーター・マウラーなどの著名な指揮者と共演して高い評価を得ている。また、2011年2月にはソロリサイタルでシューベルト《冬の旅》を歌い好評を博す。2012年第4回東京国際声楽コンクール一般部門第1位、並びに審査員特別賞、東京新聞賞受賞。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、日本声楽発声学会、各会員。東京バッハ合唱団、東京ムジーククライス合唱団、各ヴォイストレーナー。また、バッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして数々の公演や録音に参加している。

成瀬 当正（なるせ あつまさ／バリトン）

東京音楽大学付属高等学校を経て同大学声楽科卒業。研究科修了。1986年、東京文化会館新人オーディション合格。同デビュー演奏会出演。1991年、シューベルト協会国際歌曲コンクール第1位、大賞受賞。1992年94年、NHK、毎日新聞社主催日本音楽コンクール声楽（歌曲）部門入選。現在ドイツ歌曲、宗教曲等では実力派バリトンとして活躍している。毎年行われるドイツ歌曲リサイタルではピアノに、小林道夫氏、大場俊一氏、落合茂氏を共演者に、いずれも「詩情豊かな表現」「奥深い芸術性」を高く評価されている。宗教曲等独唱者としてはバッハを主に首都圏、関西を中心に全国で演奏活動を行っている。関西では「京都・バッハ・ゾリステン」に所属しカンタータ200曲全曲演奏（2005年終了）、現存する全声楽曲を演奏する。（2013年完奏）日本歌曲に於いても数多くの舞台を踏み「格調高い歌唱」と定評がある。2011年5月より東日本大震災復興支援チャリティーコンサートを年数回、復興宣言がなされる日まで継続する企画を始める。日本の叙情歌曲と童謡・唱歌の会代表。東京音楽大学、同付属高等学校兼任講師。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして、小林道夫氏のもとで活発な演奏活動を続けてきた「芸大バッハ・カンタータ・クラブ」のOB、OGを中心に、卒業後もカンタータの演奏を続けようと有志が集まり、1977年に発足しました。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラなど、各方面で活動しているため、多少流動的ですが、活動開始から既に30数年を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン、モーツァルトの古典、最近ではメンデルスゾーン、ブラームス、ドヴォルザーク等のロマン派、更にはフォーレ、プーランク、デュリュフレ、ベルトといった近代、現代のものまでレパートリーを広がっています。その演奏はどれもが様式感に則った生き生きとしたもので、共演した各合唱団、指揮者から、高い評価を得ています。過去においては、ヴェルナー・ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッチュ、ペーター・ノイマン、クリストフ・ビラー、小林道夫、八尋和美、黒岩英臣、井上道義など内外の指揮者をはじめ、横浜合唱協会、新潟メサイア合唱協会、オラトリオ東京、文京シティ・コア、合唱団「樹林」、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団など、全国各地の多くの合唱団と共演しています。横浜合唱協会とは10年以上に亘って共演を続けており、今回は14回目になります。公式ホームページ <http://www.tokio-bach-kantaten-ensemble.com/>

本日の出演者 リコーダー：古橋 潤一、海野 文葉／ヴィオラ・ダ・ガンバ：福沢 宏、土屋 涼子
ヴァイオリンⅠ：桐山 建志（コンサートマスター）、大谷 美佐子、丸山 韶、鍋谷 里香
ヴァイオリンⅡ：花崎 淳生、海保 あけみ、西尾 優子
ヴィオラ：李 善銘、鈴木 友紀子／フルート：立川 和男、勝俣 敬二
チェロ：伊藤 恵似子、小林 奈那子／コントラバス：櫻井 茂／オルガン：平野 智美

曲目解説

J.S. バッハの作品

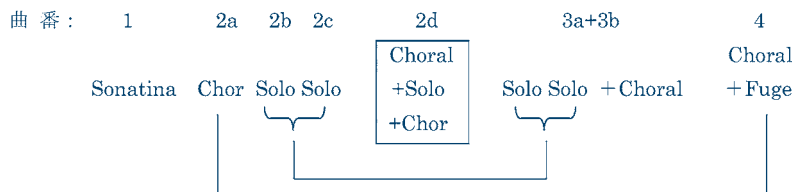
本日取り上げたのはJ.S.バッハ（以下、バッハという）初期のカンタータ、中期に作曲したモテット、そして後期の作品となるルター派ミサ曲であり、時代そして分野の異なる作品となっています。

◆カンタータ第 106 番「神の時こそ最良の時」BWV106

バッハが本格的な音楽家として活動し始めたのは、1703年、18歳の時、アルンシュタットの新教会オルガニストとしてでしたが、その4年後の1707年6月から約1年、新たな地ミュールハウゼンの聖ブラジウス教会オルガニストに赴きました。ここでは要請に応じてカンタータも作曲しており、カンタータ第106番はその中の1曲です。

カンタータの構成や作曲技法は時代によって変化しており、特に1700年頃を境に、既に世俗音楽のオペラで採り入れられていたレチタティーヴォと自由詩によるアリアが、教会音楽にも適用されるようになりました。しかしながらカンタータBWV106の歌詞は聖書によるものとコラルがほとんどであり、レチタティーヴォや自由詩によるアリアはまだ見られないことから、バッハが採り入れるようにした1713年より以前の作曲であることがわかりますし、今では様々な研究の結果、最初期の作品と考えられています。

また第2a曲の合唱から終曲まではシンメトリー構造ですが、これはバロック建築のような安定したこの構造を音楽にも採り入れるようにしたものです。ここでは第2d曲 [□で囲んだ部分] が中心となり、その両側にそれぞれ2つのソロ、さらにその両側に合唱が配置された構造になっています。



第 1 曲：「ソナティーナ」と題した器楽のみの演奏はプレリユード的役割を果たしており、2本のリコーダーとヴィオラ・ダ・ガンバが織りなすメロディーは、まさに天上の音楽と言えます。

第2a曲：まず器楽を増強したホモフォニー合唱で「神の時」を唱い、フーガ形式で「生」を描き、そして器楽が声楽に合わせたホモフォニー合唱で「死」を言及する、3つの形式からなるモテットです。

第2b曲：テノール・ソロが、ため息を表わす休符を交えながら、「生」の短さを嘆きます。

第2c曲：バス・ソロによって、人の死の定めが歌われます。

第2d曲：このカンタータの中心に位置する楽曲であり、「合唱フーガ - ソプラノ・ソロ - リコーダーによるコラル」の3要素が繰り返された後、ソプラノ・ソロの突然の切断によって、来るものへの待望を示します。

第3a曲：この曲で初めて通奏低音のみの伴奏となり、バス・オスティナート風に進んでいきます。

第3b曲：この曲の前半の「キリストの声」として歌うバス・ソロの部分も通奏低音のみですが、アルトによるマルティン・ルターのコラルが始まると同時にヴィオラ・ダ・ガンバが演奏に加わります。

第 4 曲：アダム・ロイスナー作のコラルが1行ずつ器楽を伴って唱われ、最後の詩行をフーガ形式に拡大して、歓呼する最後の高まりが響きわたります。

◆モテット「主に向かって新しい歌をうたえ」BWV225

1723年5月、バッハはライブツィヒにある聖トーマス教会のカントールとして迎えられます。この年から少なくとも数年間は週に1曲のペースでカンタータを作曲し演奏するという多忙な日々が続きます。しかしそれ以外に結婚式やお葬式など特別な機会のために依頼されて作曲することもあり、このモテットもその1つです。自筆総譜、自筆パート譜ともに現存し、筆跡や紙の透かし模様等により1726年6月から1727年4月の間に作曲されたと考えられますが、どのような機会に演奏されたかは、多くの研究がなされているにもかかわらず、今日まで明らかになっていません。バッハが楽譜のどこかにメモをしていたら誰も困らなかったのですが。

この曲は大きく分けて3部からなっています。

第 1 部：前半と後半に分けられ、「前奏曲とフーガ」と称されるような作りになっています。

第 2 部：「コラル」（第2合唱）から始まり「アリア」（第1合唱）と交互に「呼びかけ」と「呼応」の形で唱われます。

第 3 部：ここも前半と後半に分けられ、第1合唱からLobet den...を唱い始め、第2合唱と交互に唱い進みます。そして前半最後の数小節は8パートがホモフォニーで唱い、後半のAlles, was...から各パートが一緒になり4声で唱いあげます。

◆ルター派ミサ曲「ミサ曲 イ長調」BWV234

1730年代になると、バッハのドイツ語による新たな作品は極端に少なくなります。カンタータは既存の曲の一部を変更したり教会暦を補充する形で作曲する程度であり、受難曲も演奏するたびに作品の補筆や変更を行う程度でした。その一方で、ラテン語への関心が高まっていったように思われ、ラテン語で書かれたミサ曲など他者の作品を数多く筆写しています。そして1733年にはドレスデンのザクセン選帝侯に「ミサ曲」（後に「口短調ミサ曲」BWV232の前半部分となる）を献呈し、1738年から1739年にかけてキリエとグロリアからなる「ルター派ミサ曲」を4曲完成しました。BWV234はこのうちの1曲です。

6つの楽曲からなるこの曲のうち4楽曲が、ドイツ語で書かれた原曲のカンタータの歌詞をラテン語に置き換え、必要に応じて曲にも修正を加えて転用したものです。わざわざこのような手の込んだことをするよりも、新たに作曲した方がバッハにとっては容易なことのようにも思えますが、当時の考え方として「アフェクト理論」があり、例えば歌詞が「神への讃美」で合致していれば、それに似合った曲として問題なく利用しておりました。またドイツ語のカンタータに留めることなく、ラテン語曲にも利用範囲を広げる意図もあったのかもしれませんが。

第1曲：第1キリエは付点音符の際立った器楽リトルネッロによるホモフォニー合唱。独特の性格を持った合唱レチタティーヴォ的“クリステ・エレイソン”が続きますが、同時に4声部とフルートからなる5声のカノンで仕上げられています。第2キリエで“クリステ”という祈りのテキストを再登用していることが、明確な目印として認められます。

第2曲：カンタータBWV67第6曲を原曲とし、テキスト上・音楽上の対比、すなわち「神への讃美」（Vivace）と「平安、崇拝」（Adagio）を対向させることにより、音楽的な緊張感を出しています。

第3曲：独奏ヴァイオリンのオブリガート付バス・アリアは通奏低音とトリオ・ソナタになっています。

第4曲：ソプラノ・アリアはカンタータBWV179第5曲が原曲ですが、通奏低音無しの楽曲へと変化させ、それによってこの曲の印象があらゆる罪から解放された魂を伝えます。

第5曲：アルト・アリアは原曲のカンタータBWV79第2曲を転用し、ユニゾンによる弦楽器のオブリガートを伴いながら、快活な音楽を奏でます。

第6曲：バッハは原曲のカンタータBWV136第1曲に対して、テキスト“Cum Sancto Spiritu”に新たに3小節のゆっくりとした荘重的な序曲を作曲したあと、楽曲の残り全体をテキスト“in gloria Dei Patris, Amen”のみで作曲しました。

（会員：大石康夫）

F. メンデルスゾーンの作品

◆Lass, o Herr, mich Hilfe finden おお主よ、私を助けて下さい Op.96-1

（作品96：3つの宗教歌から）

メンデルスゾーンが1840年秋にロンドンへ旅行した時にブロードリーから委嘱され作曲しました。ブロードリーはいくつかの英語による詩篇のパラフレーズを提供し、その中からメンデルスゾーンがこの詩篇第13篇を選びました。ドイツ語歌詞はボンで出版する際に他者の手で書かれたと推定されています。メンデルスゾーンはイギリスでも大活躍しますが、その場作りをしたのがブロードリーの作曲の師であったモシュレスでした。彼は若き日のメンデルスゾーンのピアノ師匠でしたが、その才能に感嘆し生涯を通じた音楽活動の親友となり、自身がイギリスで築いた人脉をメンデルスゾーンに積極的に提供しました。

曲はイギリス・アンセムの伝統に従った三部形式で書かれています。第一部は主への願いが変ホ長調で6/8拍子の心を揺するリズムによるアルト独唱で開始され合唱が続きます。第二部ではト短調となり主への嘆きが歌われ、第三部は第一部が短く繰り返されて締めくくられます。

◆Herr, nun lässest du Op.69-1 主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせてくださいます

（作品69：イギリス国教会における典礼音楽用の3つの英語による聖歌から）

1847年5月イギリスからの帰途、メンデルスゾーンはフランクフルトで、姉ファニーの突然の死を知り、克服不可能な打撃を受けました。お互いの作品を助言し合った作曲上の無二の同志を亡くし深刻な抑鬱状態が続きました。スイスの保養所でようやく創作意欲が燃え上がり、6月にバーデン・バーデンでこの曲が作られました。「主が遣わすメシアに会うまでは、決して死なない」との御告げを受けていたシメオン老人が、ようやく主に出会い「主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせてください」と発するものですが、38歳の若さで夭折したメンデルスゾーンに重ねるのは何とも辛いことです。

英語によるルカ福音書の第2章29-32節（ドイツ語歌詞の訳者は不明です）に曲付けされていますが、「安らかにいかせてください」のフーガで始まり、Soloと指示された「私はこの目であなたの救いを見たからです」を経て、「異邦人を照らす光」「イスラエルの誉れ」が付点リズムを伴って強く歌われ、冒頭の「安

らかにいかせてください」が繰り返されて締めくくられます。

姉の死から半年の11月4日、メンデルスゾーンは脳溢血で亡くなりました。臨終に立ち会った親友のモシュレスは「天使のように安らかな彼の顔つきには、彼の不滅の魂が刻印されていた。」と語っています。

◆マニフィカト Op.69-3 (作品 69:イギリス国教会における典礼音楽用の3つの英語による聖歌から)

姉の突然の死後の抑鬱状態から回復し、創作意欲が燃え上がった6月にバーデン・バーデンで、この曲も作られました。英語によるルカ福音書の第1章47-55節(ドイツ語歌詞の訳者は不明です)の9節を7つに分けて曲付され、最後にDoxologie(三位一体賛美)が置かれています。バッハの有名なマニフィカトでもほぼ節ごとに曲付けされていますが、11に分けられ最後にDoxologieが置かれています。

- ①第1章47節 変ロ長調 2/2拍子 “Allegro moderatoアレグロ・モデラート”
Erhebt(あがめる)のフレーズがレガートにて、freuet(喜ぶ)のフレーズが付点で対照的に提示されながら、「私の心は主をあがめ、私の霊は救い主を喜ぶ」ことを合唱で表明します。
- ②第1章48節 変ホ長調 2/2拍子 “なぜならば、主は、はした女にも目を留められ”と、独唱が応答。
- ③第1章49節 変ホ長調 2/2拍子 “なぜならば、主は、神聖だから”と、今度は合唱が応答。
- ④第1章50節 ニ短調 3/2拍子 “Andante con moto動きのあるアンダンテ”
全曲の中心に当たり、“Barmherzigkeit(主の憐れみ)”を短調の美しいメロディで独唱、合唱が交互に歌います。
- ⑤第1章51,52節 変ロ長調 4/4拍子 “Maestoso威厳のある”
合唱が主の力を前半“ホモフォニー”で、後半は“付点リズムの対位法”的に進行します。
- ⑥第1章53節 ヘ長調 4/4拍子 “Andanteアンダンテ”
主の力を独唱群が“ホモフォニー”で歌います。
- ⑦第1章54,55節 変ロ長調 4/4拍子 “Allegroアレグロ”
wie er zugesagt mit seinem Worte(主が語られたように)と、Abraham und seinem Samen ewiglich(アブラハムとその種族に対し、永遠に)の2テーマが確信に満ちたフガートを織りなします。
- ⑧Doxologie(三位一体賛美) 変ロ長調 4/4拍子 “Grave厳粛”な三位一体賛美による締めくくり。

◆ドイツ典礼 Die Deutsche Liturgie から 3 曲

プロシア王との約束を果たしたベルリン大聖堂での礼拝式音楽の決定版とも言える曲です。

1846年11月6日レーデルン伯爵に納めた際、「私は完全な『ドイツ典礼』作品を同封して送ります。これを私は王の命令に従って書きました。送付の遅れをお詫びします。これは私にとって決して簡単ではなく力の限り行いました。」との手紙が添えられました。

1841年プロシア王に就いたフリードリッヒ・ヴィルヘルム四世による、国威発揚並びに文化繁栄政策の一環として、音楽分野ではライプツィヒで活動していたメンデルスゾーンがベルリンに招聘され音楽総監督に任命されました。しかし、保守的でア・カペラ曲を望む、王及びその官僚の宗教音楽への要求との折り合いが困難になり、1845年メンデルスゾーンの辞任が認められライプツィヒに戻りました。その辞任の際の条件でもあったのが本曲の作曲です。礼拝式に必要な短い曲を含め10曲から成っていますが、本日は演奏会に適した2重合唱による3曲を演奏します。

Kyrieキリエ イ長調 4/4拍子

2つの4声合唱の掛け合いで始まり、後半は8声のホモフォニー合唱となって締めくくられます。

Ehre sei Gott in der Höheいと高きところには神に栄光あれ イ長調 4/4拍子

ラテン語では“グロリア”に当たるところで歌詞が長く、4つに区切られて曲付けされています。

①“Andante con moto動きのあるアンダンテ”と記された8声ホモフォニー合唱で始まります。

②Allegroになって、力強い“Wir loben dich(私はあなたを讃え)”のテーマが、時々2つの4声合唱の掛け合いを交えながら続きます。

③“Der du, die Sünden… erbarme dich unser(我らを憐れみ給え)”でAdagioの嬰へ短調に転じます。

④“Denn du allein bist heilig, なぜならあなたはただ一人聖なる方”からは、Allegroのイ長調に戻って締めくくられます。

Heilig 聖なるかな ニ長調 2/2拍子

ソプラノIの高い音によるHeilig(聖なるかな)に始まり、ソプラノIIが3度下でHeiligと続き、以下順に3度下降を繰り返し、バスIIまで2オクターブ、まさに聖霊降臨のように下がってきます。“Alle Lande sind seiner Ehre voll(全地は神の栄光で満ち)”からは、8声ホモフォニー合唱が主となって力強く結ばれます。

(会員：藤井良昭)

横浜合唱協会

横浜合唱協会はJ.S.バッハ合唱作品の本格的な演奏活動を目指して、1970年に発足したアマチュア合唱団です。創立以来、J.S.バッハを中心に据えつつ、バロック時代の作品からメンデルスゾーン、ブラームス等のロマン派、さらにマルタン、ペルト等の近・現代作品まで幅広く取り上げています。常任指揮者に元東京混声合唱団正指揮者の八尋和美氏、ピアノ伴奏者に谷口明子氏、ヴォイストレーナーに松尾地恵子、木島千夏、小林彰英、佐野正一各氏を迎え、音楽・発声の両面からご指導をいただいております。また、これまでの定期演奏会では、客演指揮者として小林道夫、若杉弘、黒岩英臣、トーマスカントールG.C.ピラー各氏等をお迎えしました。1997年に始まったドイツ演奏旅行は既に3回を数え、バッハ縁りのライブツィヒ聖トーマス教会における礼拝式での演奏をはじめ、タールビュルゲル（夏の音楽祭）、アンナベルク＝ブーフホルツ、シュトゥットガルトなどドイツ各地での公演を行い、大きな足跡を残しました。バッハ没後250年の2000年には創立30周年記念演奏会として、G.C.ピラー氏をはじめライブツィヒ関係者のご協力を得て「BACH FEST 2000 TOKIO」を開催、2004年にはG.C.ピラー指揮による「マタイ受難曲BWV244b（初期稿）」を演奏しました。2015年9月には4回目となるドイツでの演奏を予定しています。なお今回より新たに山神健志氏を指揮者にお迎えしました。

正 会 員

[ソプラノ]

長尾 里美	平鹿 諭子	飯島 純子	新谷 暁	須賀 由美	藤井 節子	魚本 充子
市川 浩子	山田 都	志村 知子	高田 文子	青柳 敦子	飯島 幸子	広庭 恵美
河野 敦子	渡部 園美	土田 紀子	荒井 直子	松尾 裕子	北村千恵子	古根香菜子
前田 佳子	大塩 亜季	小野 早苗	小川 雅子	二保 美加	片山 珠代	工藤 幸枝

[アルト]

堂崎 律子	大杉 純子	新井千鶴子	中野 理子	和田 京子	馬岡 洋子	西田 和子
岩附美知子	山本久美子	藤井美智子	堀内 陽子	中山 典子	水越 淳子	鈴木理絵子
那須比奈子	保田 康子	田島 京子	山崎 裕子	今城 明美	松村千佳子	堂崎 直美

[テノール]

藤井 良昭	堂崎 浩	馬岡 利吏	土井 賢一	松本恵太郎	古根 正治	清水 光洋
岡田 亮介	長谷 雅信	和久井一男				

[バス]

新井 隆士	大石 康夫	飯島 龍哉	天ヶ瀬圭三	山田 直樹	小澤克之助	松田圭一郎
若狭 保弘	梅原 俊之	高橋 誠	平鹿 一久	安積 和彦	露木 正樹	

維 持 会 員

丹内紀久代	鹿島 和子	児玉 弓子	伊藤 邦子	気賀沢忠文	新居 康彦	竹村 重雄
万年 武	富澤 尊儀	清水 正子	梅津 実可	中山 元子	武田 サヨ	柴田 秀男
山岡 千秋	佐久間貴美	安広 百代	中西 牧子	入澤 三徳	藤井可奈子	中村小絵子
松下 孝	佐々木聰子	吉崎 桂江	友田 晃利	八尋 直美	鈴木 園子	林 雅子
柏 聡子	久保 祐子	村木誠一郎	勝山久仁子	西連寺利絵	入澤 洋子	鈴木 康司
山下 誉子	小野沢 誠	魚本 一司	平井 聡子	平井 透	石川 鮎子	笹井 平
柴田 英治	吉川由里子	国分エリ子	小見山雄次	雀部 征宜	鳥山 純一	津守 滋
土井美智子	森岡 剛	白石 洋子	日沖 憲司	本多 志織	加藤 拓朗	松田 久美
山口 綾規	田川 正浩	岡崎 希枝	恒吉 理美	森岡 美紀	山田多佳子	長谷川由里子
木村 美保	市川 純也	中村さえ子	西脇 弥彦	古宮真紀子	太田 明子	川越 信彰
新井 光恵	北原 規子	小田 稔	柏木梨重子	谷口幸一郎		

横浜合唱協会ホームページ <http://www.ycs.gr.jp>